

新潟県立看護大学学長特別研究費 平成 14 年度 研究報告

異文化看護 (Transcultural Nursing) の視点を取り入れた看護英語教材の開発

研究者 (研究代表者) 山本淳子¹⁾

共同研究者 加国正子²⁾ 徐 淑子¹⁾

新潟県立看護大学 (看護基盤科学)¹⁾ (小児看護学)²⁾

Development of English Teaching Material on Transcultural Nursing

Junko Yamamoto, Masako Kako, Sookja Suh Niigata College of Nursing

キーワード: 異文化看護(transcultural nursing), ESP, 英語教材(English teaching material)

目的

看護英語教材の開発を考える上で, ESP-English for Specific Purposes(特別な目的のための英語)の視点は重要である. あらゆる専門分野の中でも, とくに言語と密接に関わりのある異文化看護を取り上げることは意義あることと考えた. そのために必要な教材を開発することを目的とした.

研究方法

1) 日本の看護学生用の英語教材開発のために, 実際に海外で異文化看護の授業に使用されている教科書, 異文化看護に関する文献・資料を収集し内容検討をした. 2) 教材開発のために, 看護学生が英語教育求める物を知るために新入生 (有効回答 76 名) に対してアンケート調査を行った. 作成に当たり渡邊¹⁾を参考に 16 項目とし, 英語力・英語学習に対する意識・ESP 授業の希望・ESP 授業の内容の希望などを調査した. アンケートは匿名で回答も提出も任意とした. 英語能力と ESP の希望の有無についての相関関係を見るために汎用統計学パッケージ X² 検定を行った. 3) 教材開発に必要な知識および素材・文献を求め, 異文化看護学において先進国であるアメリカのシアトル・パシフィック大学看護学部 (以下, SPU) の教授 5 人・異文化看護を学習中の学生 8 人に聞き取り調査を行った.

結果

1) 文献 日本国内で英語の教科書として使用されている看護学生用教科書を 20 冊 (リーディング 11 冊 会話 8 その他 1 冊) の内容を検討した. その結果, 異文化看護を主題としている教科書は見つからなかった. 英語教材の構成の参考にするために, 外国 (米国・英国) で出版されている異文化看護文献 6 冊の内容を検討した項目の中でケーススタディ (以下, 事例) に関する取り扱い方について報告する.

構成について 1-1) 世界各国ごとに章立てをしてそれぞれの国の異文化理解を主題としている物 0 冊

1-2) 異文化理解が必要な項目 (出産・育児・食事・ジェスチャーなど) ごとに章立てをしてその中に各国の異文化に関する解説がされている物 5 冊 (Caring for Patients from Different Cultures²⁾ 他)

1-3) 国ごと, 項目ごとの章が並列されている物 1 冊 (Transcultural Nursing³⁾)

事例について A) 各章ごとに事例があり (1 から 2) がある物 2 冊 (Transcultural Nursing 他)

B) 各章ごとに事例が多数 (3 以上) あり 3 冊 (Culture and the Clinical Encounter⁴⁾ 他)

C) 内容すべてが事例で構成 1 冊 (Caring for Patients from Different Cultures)

2) アンケート 県立看護大の新入生の英語レベルは低すぎず高すぎず, 平均的な大学生の英語力を有していると思われる. 半数以上の学生に英語に対する苦手意識が見られたが, 苦手意識を持つ学生が特に ESP に対して意欲が低いというわけでもなかった. また英語力が高い学生が必ずしも ESP を望んでいるということもあてはまらなかった.

3) 米国研修について シアトル・パシフィック大学 (SPU) 看護学科他で教授 5 人に対して聞き取り調査を行った. 異文化看護授業の他に異文化看護の要素が様々な看護の教科に組み込まれていた. 看護学生の選択科目には異文化理解のために諸外国での看護研修も含まれていた. また精神科看護の授業においては, 異文化看護に関

表 1 学生の偏差値と ESP 希望の有無の関係 n=71

	ESP の希望の有無		計
	希望しない	希望する	
偏差値 55 以下	17 人	16 人	33
偏差値 55 以上	16 人	22 人	38
合計	33 人	38 人	71

表 2 偏差値 n=75

偏差値	有効値	71
	欠損値	4
偏差値の平均値		52. 6
偏差値の中央値		55. 0

表3 英語苦手・得意意識とESP希望の関係 n=75

	ESP の希望の有無		計
	希望しない	希望する	
英語が得意	7 人	9 人	16 (21%)
普通	8 人	7 人	15 (20%)
不得意	19 人	25 人	44 (59%)
合計	34 人	41 人	75 (100%)

練した資料（雑誌・新聞の切り抜き、ジャーナルの中の記事など）が教科書と併用して使われており準備に多大な時間がかけられている。全課程の中でも異文化看護が重要な位置を占めている説明を受けた。教授陣から提供された資料も人種差別・多様な背景を持つ患者への対処法・異文化理解のための民話・ビデオ教材など多岐にわたり、授業の内容の深さが現れていた。

学生に対しては 20・50 歳代の 8 人にグループで話を聞いた。将来、現場で出会う様々な背景を持つ患者のために、異文化を人種の問題としてではなく、人種差別・麻薬・アルコール中毒問題など多種多様な問題も含めた人間理解という観点から、あらゆる状況にも対処できるような教育が提供されていた。

考察

1) 日本で使用されている看護学生用英語教材で、異文化看護をテーマにしたものはない。これは日本の特徴から考え、欧米ほど必要性がないためもあると考えられる。しかし国際化が都市部だけでなく地方にも広がる現在、このテーマを学ぶことはますます意義が高まると予測できる。外国の文献では、国ごとの異文化を個々に学ばせるというより、ユニバーサルな異文化問題を多角的な視野で学ばせる構成になっている傾向が見られる。6 冊の書籍のうち 4 冊は具体的な事例が中心である。このような具体的な事例を通して学習することで内容理解が促進され、ひいては学生の英語力の向上につながることを期待できる。興味を持続させ魅力的な内容にするという意味においても国内外で収集した事例の素材を多用することは効果的であると考えられる。2) 本学の学生のレベルは看護学生として全国的にも平均的であるが、苦手意識を持つ学生が 44 人(59%)と過半数を占めている。しかしどのレベルにおいても ESP を希望する学生がそれぞれ約半数存在する。英語が得意であるほど ESP を希望する、英語が不得意であるほど ESP は希望しないと立てた仮定に反し、両方とも上記の関係において有意差はなかった。別の見方をすれば、看護知識も大学レベルの英語も基礎段階にある一年次ですでに、半数以上の学生が、得意・不得意にかかわらず ESP を望んでいるとも言える。このことは、看護大学で英語を学習する以上、英語力と看護の知識をできるだけ吸収したいという、学生たちの強い意欲の表れであると考え、その意欲に応える教材開発の必要性を感じる。

3) SPU での実践のように多角的な視点で様々な異文化の知識を深めさせ、あらゆる状況に柔軟に対処する態度を涵養する教育は日本でも重要性が高まるであろう。英語教育の枠組みのなかで異文化看護を考える以上、理解しやすい基本的な英語教材の開発を念頭に入れるべきであると考察する。

結論

文献検討や本学の看護学生に対する調査結果・米国での聞き取り調査などを通じて、異文化看護の重要性を認識しこのテーマに関する教材を開発することの意義を再確認した。学生の英語能力は平均的だが、苦手意識を持つ割合も高いため、学生の興味をひく基礎的レベルの英語教材開発に努める必要がある。異文化理解と外国語理解は密接な関わり合いがあるため、二つを結びつけることで相乗効果が上がることも期待できる。今後は教材研究会の参加・専門家へのインタビューなどを通し、看護学生のための英語教材の開発を目指していきたい。

文献

- 1) 渡邊 容子. 臨床看護婦の英語の必要分析. The Language Teacher. 1988; 22(7): 29-37.
- 2) Galanti, G. Caring for Patients from Different Cultures. Philadelphia: University of Pennsylvania Press; 1997.
- 3) Giger JN, Davidhizar RE. Transcultural Nursing. Missouri: Mosby; 1999.
- 4) Gropper, R. Culture and the Clinical Encounter. Yarmouth: Intercultural Press; 1996.